

徳島県・社会医療法人 杜のホスピタル

〒774-0017 徳島県阿南市見能林町築溜1番地1
<http://morinohp.jp/>

- 理事長・院長：高坂要一郎
- 設立：1964年
- 病床数：114床
- 診療科：精神科、心療内科、内科



心の健康回復・増進に多様な試みでアプローチする精神科専門病院

阿南市と県南西部の広域医療圏

徳島県阿南市。徳島市から小松島市を挟んで南南東へ約20キロ、それより県南の広域圏における中心の町で、人口約7万人。今日、蛍光体や発光ダイオードの一大産地で、徳島県次世代LEDバレイ構想(LED光産業集積計画)を掲げる「光のまち阿南」は、世界的にも有名である。

社会医療法人 杜のホスピタル(高坂要一郎理事長・院長、114床=慢性期60床、急性期54床)は、JR牟岐線(阿波室戸シーサイドライン)の阿南駅から南へ1つ目の見能林駅より徒歩5分の、小高い山と田畑に囲まれたのどかな場所にある精神科および心療内科を標榜する精神科専門病院だ。

医療圏は阿南市と県南西部で、平均在院日数は、高坂理事長が就任した平成26年度の339.8日から、令和2年2月までの1年間では167.7日に半減している。在院日数減少の傾向は、全国でも徳島県でも同様の傾向にあるが、同院の場合には数年来、その減少がこれらに比べても著しい。またこれを反映して、病床回転数が200に近く、5年前に比べて約2倍の数値となっている。

この結果は、高坂理事長の「精神科病院における課題はいくつもありますが、この中で当面の最も大きな課題は平均在院日数の短縮化だといえます。病院は患者を治療する場なので、そのために治療目標をしっかりと立て、患者を早い段階で社会復帰させることが大事です。そうでないと治療レベル、患者の社会的能力は確実に低下してしまいますし、医療費の適正化にもつながりません。もっと短くする工夫が必要です」という強い考えがベースとなっている運営によるものだろう。

昨年1月にグランドオープンを果たした同院こそがその舞台だが、『「ホスピタル」の本来の意味は、病院ではなく、『休養とエンターテインメントの場所』なのです。その精神を基盤に当院で現代精神医学的アプローチができたらと考えています」と高坂理事長。この考えにのっとったハード、ソフト両面からの立体的取り組みの素晴らしさが随所にうかがえるのが、まさに特徴であり強みになっているといえる。

風通しの良い地域に開かれた病院

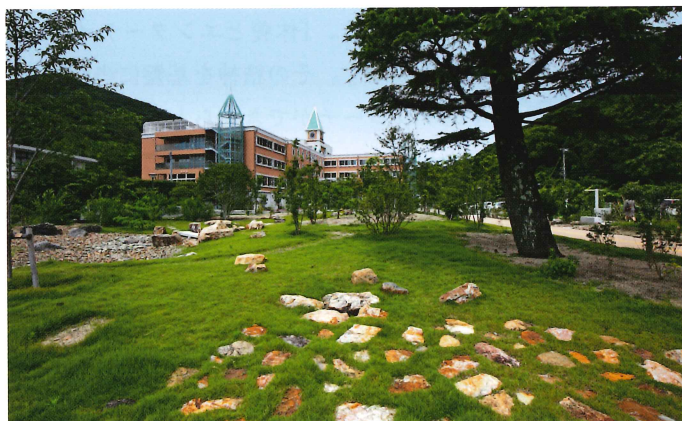
「ベネチア風」(高坂理事長)という5階建ての上に、

「CARPE DIEM」(映画『いまを生きる』より)と書かれた時計を設えた尖塔のある同院は、周りの風景と“溶け合っ”ヨーロッパ田園風景の趣を醸し出す象徴的建造物となっているように見える。アクセスするにはその城のような外観が目印となるはずだ。

昨年1月に新館が完成し、「精神科学と文化活動を通して、地域と共生する病院」を目指し、移転運用を開始した。敷地が周囲の土地とフラットであることと、その間に障壁がないことが「風通しの良い地域に開かれた精神科病院」を彷彿させる。門すらなく、車で、徒歩で同院の敷地に入っていき、“城”の玄関に到達するまでに、何の戸惑い、緊張、躊躇などの気持ちを抱くことがない。

旧館の跡地に広がる前庭は、京都の作庭家古川三盛氏に依頼し、同院の意を汲んだ同氏が意匠を尽くして設計し造ったものだ。ここは枯山水、さまざまな樹木、草花、芝生が調和している。遊歩道の散歩だけではなく、庭園内に入って石の上に座ったり、名札のついた樹木や草花を観察したりすることのできる癒しの空間であり、患者のリハビリ空間としても機能する場となっている。

まだ作庭から日が浅いこともあって、植栽された樹木や草花が十分に生育していないが、あと2、3年もすれば、四季の移ろいを身近に感じることのできる地域の“名所”となるだろう。



外観と庭 作庭家の古川三盛氏によるもので、四季の移ろいを愉しむことができる意匠。枯山水や手押し式のポンプもあり、散歩が楽しい。

その一部には菜園があって、訪れた時には、ナス、ミニトマト、カボチャ、ゴーヤなどが実っていて、患者と看護師がたわわに実ったミニトマトを収穫していた。「この収穫したトマトは食事の際の添え物にしたり、患者が集まって行う運動療法の合間のおやつとして食べたりします」ということだが、ほかの野菜もまた然り。イチジクやバナナなども植えられている。しかも「患者の治療効果を上げる意味で、患者がこうした作物の成長を観察し、収穫し、さらには食すまでの一連の行動が、メンタル面においても多大な好影響を及ぼすのです」(高坂理事長)ということだ。

ハード、ソフト両面から充実の医療を構築

庭園と菜園散策を楽しんだ後、石川 聡リハビリテーション部部長(作業療法士)の案内で“院内ツアー”が始まった。

病院玄関を入り、風除室を通り抜けると、そこは美術館のエントランスロビーを思わせるような2階天井までの吹き抜けで、市民に無料提供しているギャラリーとしても機能している。その中央に「サモトラケのニケ」が鎮座して一度肝を抜かれた。

また、もう一つ目を引くのが、吹き抜けに舞う鳥のモビール群だ。「理事長の発想で、患者さんたちが“鳥のように自由に飛び立てるよう



収穫する患者たち この日はミニトマトがたくさん採れた。

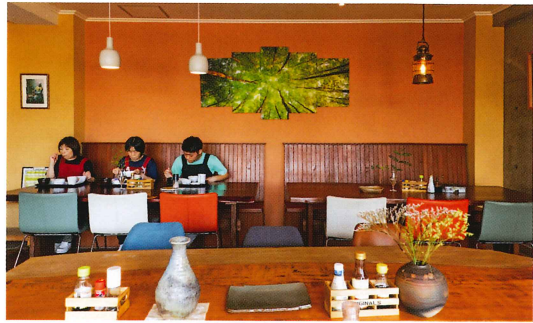


ギャラリー 早見賢二氏作の鳥のモビールが舞う。「鳥のように自由に飛び立ちましょう」の思いを込めて。赤の飛行機は患者の作品

に”という願いを込めて飾られたもの」(石川部長)だそうだが、北海道で活動する木工クラフトアーティストの早見賢二氏の作品だ。その中央に大きな赤い飛行機のモビールが一つ。これは同院の患者が制作したものだというが、その出来栄は相当なものだ。加えて、高坂理事長制作のミレニアム・ファルコンが壁面から飛び立とうとしている。

このエントランスロビーこそ、同院のポリシーないしはコンセプトである「精神科学」、「文化」、「救急・リハビリテーション」を三位一体とした医療推進の象徴であるということ、これに続く院内ツアーで実感することになる。

玄関脇には職員が利用する食堂があるが、高坂理事長直々に選んだ趣あるテーブル、椅子に加え、壁や棚などに前庭に咲いた草花がおしゃれに飾られていて、どこかの街角の瀟灑なレストランを思わせるような仕様になっている。奥にある厨房では、管理栄養士が中心になって職



職員食堂 落ち着いた空間に会話が弾む。内装はインテリアデザイナーの河野 正氏による。



1階から2階に上がる階段の壁絵「imagination」木谷佳子氏の作品。自然界での色とりどりの風景は、多様性や社会参加をイメージしている。

慢性期病棟
(R病棟・3階・60床)

階段には情熱の赤が印象的なワシリー・カンディンスキーの作品を飾る。



急性期病棟
(A病棟・4階・54床)

こちらには落ち着いた青のパウルクレーの作品を。

員と患者の食事を作っているが、「給食がおいしい」は、同院の自慢の一つです」と、たまたま遅めの昼食中だった職員3人が口を揃えた。

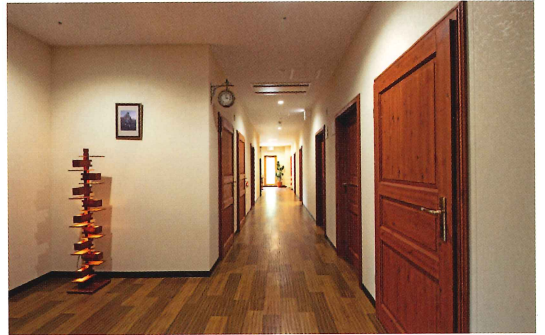
1階から4階に至る階段の踊り場壁面には、それぞれに“ならではの意味”がある大きな絵画が飾られている。

2階が外来メインのフロアで、中央部分に受付、外来待合室、診察室、薬剤室がある。ここには診察、検査のためのX線室、全身用CT、21チャンネル脳波計、超音波、検査心電図なども完備されている。

また、精神科医療でとりわけ重要な役割を持つ精神保健福祉士による患者およびその家族の相談や、支援の窓口となる医療連携室、売店もここに位置する。医療連携室室長の森岡加奈さんは、「円滑な相談、支援をするために、当院の医療圏に当たる阿南市より南の地域の行政や医療機関との緊密な連携に気を配っています」と話す。



外来待合室 4診あり、うち歯科は週3回、地域の歯科医が診療に当たる。



職員エリア 気持ちの引き締まるような重厚な空間。左の床置き照明はフランク・ロイド・ライトの作品

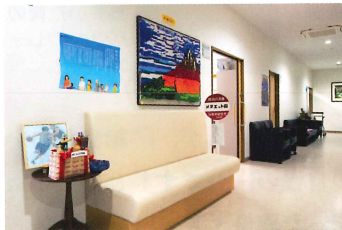


作業療法室にて茶道 このほか、書道、機織り、音楽療法、革細工、絵画などの活動を行う。



重度認知症ケア「ナセバーナ」取材当日は第19回カローリング選手権が開催されていた。

ちよつと拝見



アートが点在する院内 点在することが、患者の気づきや想像につながる。「メヌエット」の前には停留所が。



操作室 どこでもドアをイメージしている。「どこでも行けるように」と願って。右の壁にはマスキングテープを使った患者たちの作品が見える。同院には高坂理事長のアイデアとユーモアと優しさが随所にある。



歩行湯



精神科デイケア「メヌエット」それぞれが思い思いに作業を行う。



ダイルームにて アイスクリームを味わう。野山の眺めも良い。



医療連携室 手前左は森岡加奈室長



特別室「NAGOMI」



ゲストルーム 講演会の演者などが宿泊でき、2室ある。



杜のホール 約130人を収容でき、コンサートや文化講演会が開催されている。



ジャズコンサート
2019年
6月3日



屋上広場 患者の外気浴や職員のリラクゼーションに活用



イベントポスター デザインはすべて石川部長による。

2階にはほかに作業療法室、歩行湯、トレーニングルームがあり、さらに、精神科デイケア「メヌエット」と重度認知症デイケア「ナセバーナ」があって、この日もそれぞれの部屋で、茶道家を招いた季節感のある茶菓子、茶花を用意した本格的な茶道、カーリングを模した運動療法の部屋の脇で、件の菜園で収穫した大量のミニトマトを看護師と患者が小皿に分けていたが、運動療法の後のおやつとして供するということがあった。

また、理事長・院長、副院長、看護部長、事務部長などの幹部管理職の部屋やカルテ・書類庫、医局、図書室・会議室、ゲストルームなどもこのフロアにあり、いわば管理棟として機能している。

3階は慢性期病棟（60床）で、開放病棟と閉鎖病棟に分かれ、その間の仕切りドアは患者の状態に応じて8床分が可変式になっている。病室、デイルームに囲まれる形で、中央にはそれぞれのナースステーションがあり、その間にカンファレンス室がある。ナースステーションからはデイルームが見える位置にあるので、常に患者の行動を観察し、見守ることができる。また、開放病棟、閉鎖病棟それぞれに診察室、専用浴室が配置されている。

4階は急性期病棟（54床）で、こちらも開放病棟と閉鎖病棟に分かれていて、病室、ナースステーション、デイルーム、診察室、浴室など、

3階と同様、開放⇔閉鎖病棟と患者が移動しても、同じスタッフが継続してみられる機能的なレイアウトになっている。すべてのフロアが色合い、壁に飾られる絵画、あるいは落ち着いた雰囲気の調度品などでトータルコーディネートされている。

出色なのは5階のホワイトを基調とした明るい講堂（ホール）である。グランドピアノが置かれ、音響設備もあるここは用途の幅が広く、音楽療法につながるコンサートや文化講演会などのさまざまなイベントのほか、職員の勉強会などにも使われる。写真をとくとご覧いただきたい。その素晴らしさが垣間見えるだろう。ホールを出れば、そこは屋上広場で、この用途も幅広い。

一方で、こうした秀逸なデザイン、アメニティー、構造などのハード面を十分に利用し、機能させるソフト面での充実も同院の「力」である。この基盤となっているのは、高度な多職種によるチーム医療の実践、精神科救急体制（24時間）、地域社会との連携、文化的活動などにほかならない。

院内で働く職員の生き生きとした表情や働きぶりが印象的だったが、働きやすい上にモチベーション喚起につながりやすい環境なのだろう。ハード、ソフト両面からそういう空気が生み出されることこそが、精神科専門病院が本領を発揮するための要諦である。「杜のホスピタル」は、そのことを知る病院である。